

## ろくべん館だより Vol.37

## 『古き良きものを大切にすること—英国滞在の巻』

2月の英国は雨ばかり続いた。来る日も来る日も雨。雨が止んでも流れる雲は途切れることを知らず、なかなかお日さまを見ることはできなかった。

この冬の英国は12月から雨が多く、250年ぶりともいわれる降雨量を記録していた。特に南西部は、洪水の被害で線路が水浸しになり鉄道が止まったり、6万世帯が停電したりと甚大な被害をもたらした。

滞在していたオックスフォードの町には2本の川が流れている。1つはチャーウェル、そしてもう1つはテムズ。大学の建物が並ぶ中心街への入り口には、モードリン橋が架かり、その下をチャーウェル川が流れている。川の岸边は普段なら芝生の植わった緑地帯が広がっているはずだが、ベンチは背もたれだけが水からちょっと顔を出しているくらい、サッカーのゴールもラグビーのピラーも半分は水に浸かっていた。

このモードリン橋を渡ったところにあるモードリン・カレッジに、聖歌隊の歌を聴きに行った。夕方六時の鐘が鳴ると、夕べの礼拝が始まる。中に入るとほとんどロウソクの灯りのみで薄暗く、チャペルの中はよく見えない。本来なら見事な彫刻が壁を飾っているのだが、暗い中を聖歌隊の青年たちが入ってくる。その厳かな歌声が実に美しくチャペルに響いたことは言うまでもない。

今の時代でも、夕べの儀式にはロウソクが使われている。目新しい物といえば、聖書や賛美歌の文字を読むために手元を照らすほんの小さなスポットライトのみである。それもロウソクを立てる燭台の下に目立たないように取り付けてあった。大学の晩餐会に招かれた人の話では、その食卓を照らす灯りもロウソクのみだという。

オックスフォードの中心街は観光客でごった返している。冬でさえ混んでいると感じるのだが、夏はもっともっと混んでいるのだと言われた。道路に面して小さな店が軒を並べている。昔からの間口の狭い入り口とショーウィンドウが連なり、それなりに趣のある商店街を成している。そんな中に大学の建物は隣接している。城壁のような壁の向こうへ一歩足を踏み込むと、表通りの喧騒とはまるで違う静謐が支配する空間がある。

数あるカレッジの中には見学可能なところもある。映画「ハリー・ポッター」の舞台として使われたクライスト・チャーチ・カレッジやボードリアン図書館などは観光客の集中するところなのだが、それでも実際に学生や教職員に使われている建物なので、「静粛に！」と控えめな看板がかかっている。ここでも中国からの団体旅行者をよく見かけるのだが、図書館の中庭で大声で話している傍らを「しっ！」と口に指を立てて年配の大学関係者が通り過ぎていくのを目撃した。かつて景気の良かった時代、日本人旅行者が世界中の観光地を席卷していた3、40年前には、自国の人々もこうしていたのであろうか。

オックスフォードには博物館や資料館、植物園などの研究に付随した施設も多い。中でもお気に入りなのが、ピットリヴァース博物館。ここには世界中から集められたガラクタ、いや民族・考古資料が山ほど展示されている。ピットリヴァースとは、これらの資料の寄贈者の名前で、彼は資料を寄贈するにあたり条件を付けた。大学の研究や教育に生かすこと、そして展示の構成を変えないことである。彼の遺志は受け継がれ、展示物は国や文化圏別に分けられるのではなく、種類や目的別に並べられている。つまり機織りの道具であれば、アジアのものも南米・北米先住民のもの、アフリカのものが同じ場所に展示されている。そこに類似点と相違点を発見することで、人類としての進化の試行錯誤が解明されるということのようだ。これらのガラクタ、いや宝物は薄暗い中に所狭しと展示されており、一日かかっても見学しきれものではない。呪術具、装飾品、トーテムポールからドードーの剥製まで、この暗闇の中で時間と空間を超えた広い世界に迷い込んだような気分になる場所である。

これ程観光地として世界中から人が集まるところなのに、頑なに大学や研究施設の雰囲気は守り続けられている。どこかできちんと一線を画しているのだ。こういった観光とその土地の独自性を共存させている場所で思い当たったのが、日本の高野山だ。一方は世界の学問の府、こちらは日本の仏教の拠点だが、自らの文化・伝統を大事に守り続けることが、それぞれ独自の魅力を発しているように思う。結果、それに引き付けられ人が集まって来る。自らが人を手招きしているわけではないのだ。

今の時代、時間の積み重ねの中で試行錯誤を繰り返して蓄えられた伝統や文化を守っていくことは実に難しい。ともすれば時間や手間をかけてつくられたものが、貨幣価値に換算され、その経済性が優先される。道理を曲げてでも、豊かさや速さや大きさが追及されてゆく。

水は低いところに流れる。オックスフォードの町や郊外で目にした増水した川は、たいてい公園や運動場やメドウと呼ばれる羊や馬の放牧地を流れていた。昔からそういうふうに土地を利用してきたのだと、日本に戻ってから聞いた。特有のなだらかな曲線を描く丘の低地は、緑地帯として美しい景観も生みだしている。あの曇り空とレンガや石の建物、そして放牧地の緑のくすんだ色の冬景色を思い出し、なるほどと深く頷いた。

